聖霊降臨節第 19 主日礼拝説教要旨(9 月 27 日)

『いやしと解放』清瀬弘毅教師

マルコによる福音書 3:1-6

今日の所は安息日について語られます。これは、重要な掟で、神が聖別されたので、主を礼拝して休む日です。病気であっても、命に関わらないなら、治してもいけなかったのです。

主イエスがこの日に会堂に入られると、手の萎えた人がいたのです。石工で、労働中にケガをしたのかも知れないと伝えられています。人々、特に、ファリサイ派の人々は、主イエスがこの人を癒されるか注視していました。

そうした中で、主イエスは“安息日に律法で許されているのは、善を行う事か、悪を行う事か、又、命を救う事か、殺す事か、”と問うたのです。現世的になっている律法学者達の中で、主イエスは神の国の支配を現わそうとしておられました。律法の目的は神と人への愛である。しかし、ファリサイ派の人々は主を捕らえる為、罠を掛けようとしていた。

手の萎えた人は苦しんでいる人間です。この人が神の祝福の外に置かれていた。4 節の「命」と言う語（プシュケー）は、神によって造られた人間の尊い価値、値打ちを意味する言葉です。だから、この人もまた、神が愛して止まない尊い人間なのだ。主イエスは、彼の苦しみ、悩みに寄り添い、彼こそ、「神の礼拝の真ん中に置かれる人だ」と言われる。そして、その人に「手を伸ばしなさい！」と言われた。すると、その人は元どおりに癒されたのです！更に彼は、律法の縄目からも“解放された”のです！　翻って、私達にも、心の傷、苦しみ、悩みなど多くの問題があるのではないでしょうか？それらすべてから解放してくださいと、主イエスの十字架のもとに出て行って、新しい人生の出発をしようではありませんか。復活の主は、今も生きておられ、世の終わりまで、いつも、あなた方と共におられるのです。祈りましょう！